

## ゴローニンの『日本幽囚記』

小嶋祥三

わたしの手元にゴローニン『日本幽囚記』の下巻がある（他の巻はない。井上 満訳、岩波文庫）。奥付に昭和二十一年六月十日第一刷発行、定價拾圓（税共）とある。父が買ったものだろうか、昭和廿一年九月十日と購入日（多分）がインクで書かれている。戦争直後の事情を反映して、紙の質は極めて悪い。

さて、ゴローニン（と書き改めます）は19世紀前半のロシア海軍の軍人でディアナ号の艦長だった。1811年6月4日に千島列島南部の測量を行っている時、松前奉行所の役人に捕まり、2年3ヶ月間松前に抑留された。ロシア側は対抗措置？として、日本人の廻船業者・高田屋嘉兵衛を捕縛した。結局、これが功を奏し、嘉兵衛らの尽力で、1813年9月26日にゴローニンは釈放されることになった。『日本幽囚記』は抑留されたときの記録で、1816年に3巻本として出版された。この本はヨーロッパ各国で翻訳されたようだが、1821年にはオランダ語訳が日本にもたらされ、1825年には邦訳が出版された。高田屋嘉兵衛も訳書を読んだという。鎖国中の日本であったが、原著出版から10年を経ずして翻訳本が出ていたとは驚きである。ゴローニンは、幕府の閣僚や学者がオランダや清を通じて、欧州諸国の情報を入手し勉強していると認識している。

手元の『日本幽囚記』下巻は、内容からして、原書の第3巻に当たるようだ。そこには日本や日本人に関する記述がある。ここでは興味を引いた点を取り上げる。ゴローニンは書く。日本人は全体として、天下を通じて最も教育の進んだ国民である。日本には読み書きのできない人間はいないし、国の法律を知らないものはいない。法律の要点は町や村の適当な場所に掲示されている。ゴローニンが接触したのは役人が多かっただろうから、読み書きはできただろう。日本人全員が読み書きができるということはなかったはずだ。ただ、法律の要点が掲示されていることは、読めることを前提にしているので、識字率は高かっただろう。松前のような辺境の地でゴローニンがこういう感想を持ったことは心に留めておいていい。ゴローニンは、日本には偉大な科学者がいないという批判に対して、欧州にはその代わり読み書きができない人々が大量にいる、と反論している。確かに、江戸時代後期（幕末を含む1800年以降）の日本の識字率は、世界的に見ても、とても高かったようだ。キチンとした調査や統計がなかった時代なので、正確な率を出すことは難しいだろう。寺子屋の数や、そこで学んでいた子どもの数を推測し、識字率を出しているようだ。もう一つは、江戸時代に日本に来た外国人が書き残した書物など記録が手掛かりを与えてくれる。ゴローニンのこの著書もその一つだろう。高い識字率は日本の発展に大きく寄与しただろう。

ゴローニンは書く。幕府の方針で、欧州の地理、社会、政治、軍事、科学、産業などに関する知識を一般の日本人は知らない。しかし、日用品の制作に関する産業は欧州並みに発達しているし、地球の形状や測量法など、科学技術に関する知識を持っている。もし、

人口が多く、聡明犀利で、模倣力があり、忍耐強く、仕事好きで、何でもできる国民が、必要に迫られて国を開き、欧州の文明、科学技術を取り入れようと決意したら、日本は瞬く間にそれを成し遂げ、アジアに君臨することになるだろう。清など日本の周辺諸国もそれに倣い、世界に影響を与えるだろう。以上、ゴローニンの記述を表現を多少変えながら、紹介した。これは明治維新の50年前の記述である。日本に関して言えば、歴史はゴローニンが予見した通りに進んだ。日本の边境の地における二年三ヶ月の見聞でこれだけの予見ができるとは、すばらしいことだ。

幽囚の身であるにもかかわらず、ゴローニンの日本に対する過分の評価はいささか面映ゆい。ただ、これらの点は今も聞かれるような気がする。国民性といったものだろうか。